

# 禮拜得髓

鹽原祖道

正法眼藏のうち禮拜得髓と題せられる一篇がある。其の中に含まれてゐるうちに人間の價値に對する標準を示される點や其の他に就て興味深い問題をこゝに取出して見やうと思ふのである。

「修行阿耨多羅三藐三菩提の時節には導師をうることもとまかたし」とあるが如く、高祖大師によれば眞理を體得しようとするものにとつて第一に重大なのは導師である。即ち正師を見出さなければ求道者は永遠の理想を把握することは出来ない、と云ふ事であり、第二に重大なのは此の師に従つて一切の縁を投げ捨て、方陰を惜しんで精進辨道することであり、師を疑ひ精進を缺くものは同じく眞理を體得することは出来ないのである。

今、其の導師は「男女等の相にあらず大丈夫なるべし恁麼人なるべし野狐精にしても善知識ならん」とあつて、野狐精にして善知識が眞個の導師であり、其の眞個の善知識が或る時は佛となり、或る時は小供となり、相手次第の人を導師と頼まなければならぬ。そして其の人に隨身したら自己を投捨てねばならぬ。

今、高祖大師に就いて見れば日本には吾が師と仰ぐべき「人師」なく、支那に渡り遙かに宋土の知識を訪んに如かずとの大決心のもとに叢林を歴參し、遂に人天の導師一代の宗匠は長翁如淨禪師其人なることを知つて天童山に登り、

禪師に師事し此に師資の上に全く同一なる面授の法門現成してより日夜參禪怠り給ふ事はなかつた。或る日一人の者が坐睡してゐるのを如淨禪師は、參禪は身心脱落を要す云々の可責し給ふ語を傍にて聞き給ひ、豁然多年の大疑團を氷解して身心脱落脱落身心の活生涯を得給ひ御皈朝遊ばされたものである。

即ち修行阿耨菩提の時節に於て導師を得てより、爲法不惜身を以て遂に佛祖の大道を參究したまひし事は、明らかに「われ發心よりこのかたかくのごとく修行して今日阿耨多羅三藐三菩提を得たるなり」と述べられてあります。

是の師を見出すのに第一第二の過程に於て遂に迷蒙を斷じて佛の眞髓を體得した場合に彼れをして體得せしめた畢竟のものは、他の何人でもなく「脱落身心の師すでに自ありき」彼の自己である。即ち彼の人格の底より出づる至誠至心である。「髓を得ること法を傳ふること法を傳ふること必定して至誠により信心による」と述べられてある。

其れなら眞理を體得せしめた至誠信心とは何であるか。其れは勿論外より與へられるものではないが、また自分より出づるものでもない。自から欲して自から努めて至誠信心を作り出す事は出來ん。只それには

「たゞまさに法を重くして身を軽くするなり。世をのがれ道をすみかとするなり。いさゝかも身を顧みること法よりも重きには法傳らず道得ることなし」

即ち眞理體得の究極の契機は法を重くして身を軽くするよりほかにないのである。故に「身心はうることをやすし世界に稻麻竹葦の如し」とたゞ此の身心を以つて法の容器とすることに於てのみ我等の身心は稻麻竹葦よりも價值あるものとなるのである。故に我等にして自己の生活に價值あらしめんと欲するならば、此の價值なき身心を全然「あふことま

れなる法」のために奉仕しなければならぬ。

例へば、我々の叢林生活に於ける必要は道心を主体として、名利を離れ發心修道の坐禪僧でなければならぬ。そこには私心が許されないのである。大衆とともに止住するは公界の道場に捧げた生活であるから、其れを離れて佛家に止住する事は出来ないからである。故に日常叢林生活の四威儀に對して細微な道心を以つて、自己は凡て奉仕的態度である。全く無條件的である。それはもとより法の爲めにする法の精神である。此の精神あつて佛道が成するのである。

此の時『法』は宗教的には全く佛法であり、之れを自己の内に於て見れば生命である。以上の如き立場からしても、法の爲めにと云ふ事に於て人間の價値に對する一つの確固たる標準が生れて來るのである。故に大法を保任し、眞髓を得たものは、露柱燈籠諸佛野干鬼神男女貴族踐民の如何なる姿であつても、そこに禮拜すべき貴さがある。その物その人が貴いのではなくそこに具現せられた法が尊いのであり、その得法を敬ふのである。

「無上菩提を演説する師にあはんに種姓を觀することなかれ。容顔を見ることなかれ非をきらうことなかれ、行をかんがふることなかれ。たゞ般若を尊重するがゆゑに」

とあるはそれである。進んで宗乗の上より見れば、禮拜其のものは佛祖の大道に參得することより「佛祖卷」にまさに佛祖の面目を保任せるを拈じて禮拜し相見す佛祖の功德を現舉せしめて住持しきたれり、禮拜しきたれり、と云ふお言葉がある。佛祖の現成とは禮拜の事である。佛祖の全功德が禮拜にすつかり具はつてゐる。

陀羅尼の「卷には禮拜は正法眼藏なり。正法眼藏は大陀羅尼なり。」だから單なる自己の立場にては禮拜も得髓もない。

此の身心が法の全体に現成した時得髓がある。二祖慧可大師が全く達摩大師になつた時である。

かくて人間はその保任するところの法に應じて價値を獲得する。この價値の標準の前には世上の一切の尊卑の差別は權威を持たない。『われは大比丘なり。年少の得法を拜すべからず。われは久修練行なり。得法の晚學拜すべからず。……われは三賢十聖なり。得法せりとも比丘尼等を拜すべからず。われは帝胤なり、得法なりとも、臣家相門を拜すべからず。』

と云ふ如きは『不聞佛法の愚癡のたぐひ』である。即ち世間的な階級秩序は法の權威によつて悉く覆へされる。

この見地から高祖大師は世上に行はれる一切の差別に對して痛撃を加へられ、特に攻撃するのは佛教界に著しい女の差別待遇である。高祖は暖い同情を以て宋の末山尼了然が如何に志閑禪師を教化したか。また仰山の弟子妙信尼が如何に十七僧に痛棒を喰はせたかを述べられ、さうして女流もまた男子と同じく得道することを説いた後淫慾の誘惑として女を斥けるものを痛罵して、

『女人なにのとがゝある男子なにの徳かある、悪人は男子も悪人なるあり善人は女人も善人なるあり聞法をねがひ出離をもとむることかならず男子女人によらず云々』女人の濟度を拒むのは人類の半を捨てるのであるとまで述べ、進んで高祖は『日本にひとつのわらひことあり』として女人禁制の道場ある事を擧げて説かれてゐる。

しかし我々はこゝに人間全体に對する高祖の御態度を透見することは出来る。道を得た比丘尼の存在することは、女人全体の「道への可能性」を立證する者である。曾て悪人であつても道を得たことは一切の悪人の「道への可能性」を立證

するのである。それは一切の人間は稱麻竹葦の如き身心を法の容器となし得るが故に、人間は平等である。故に人は得法を禮拜しなければならぬ。

この禮拜得髓の卷に世上の階級破壊の努力の痕は明らかに推意することが出来る。

『小國邊土の國王大臣』を比丘尼よりも賤しとし高祖大師の時代に於ける武士階級に關するにせよ鎌倉幕府の將軍も高祖の眼には貴くない。美しい法衣に官位を誇る僧侶に至つてはむしろ唾棄すべきものである。人間の價値はこれらの一切の外衣をはぎ去つて赤裸々の姿に於て認めなければならぬ。其の價値の標準は人生の深い根底、人間の内奥の核に突き入つて彼の意志の方向を全體として統一として價値づけるものである。

人間は眞にその人間性を失はぬ限り、無常迅速なる現世を超えて永遠の法を慕ふ従つて世上の差別に煩はされることなく、それ自身の貴い魂を持つと云へる。然して人生の意義は

「あひ難き法に」逢つてそれを得ることに認められ、然らば法を目標として價値を獲得せんとする我々の努力は我々の生活の最大意義とならなければならぬ。

こゝに高祖大師の思想の優れた特徴がある。永遠の理想(法)を自己の全人格によつて把握せんとする人間の努力に、充分な意義を與へた者であると思ふ。

『法を重くして身を軽くすべし』と云ふ高祖大師の標語は『かくして努めてやまざるものは遂に救はれる』といふ思想に接近してゐるのである。それは生活を永遠に奉仕させることである。

『一向に佛法に身心を投ぜんことを、ふかくたくはるこゝろとせるは佛法かならず人をあはれむことあるなり。おろかなる人天なほまことを感ずもおもひあり。諸佛の正法いかでかまことに感應するあはれみなからん。土石砂礫にも誠感の至神はあるなり』と述べられてゐる。高祖大師の所謂の「法」が人類の文化の根源でありまた目標である。

以上の如く得法は上下尊卑に依らぬものであり、貴ぶ所は得法にある。其の法とは無上菩提の正法であり、佛々祖々に得入の妙法であり、此の妙法は他より來るにあらず本來具有の妙法である。けれども修せざればあらはれず、證せざれば得ることなし。と云ふのである。

故に禮拜するのは男女の相にあらずして本淨の妙徳、即ち法を得たる人を禮拜する事に存するのである。

偉大なる高祖承陽大師の御生涯を、我々は單なる智慧を以つて計り得ざる深さと廣さとがある。従つて禪師の思想なり御人格なりを如何に巧みに表現しても、其れは辛うじて片鱗を現はしたにすぎない。殊に辨道話の卷に

『しるべし佛家には教の殊劣を對論することなく法の深淺をえらばずたゞ修行の眞偽をしるべし』と説かれる。

實踐修道を宗旨の本來として行、即ち實踐を宗教理想の全體價値に究盡せられる高祖大師の精神生活を、概念的理解によつて説明し盡されるものではないが、吾等今學窓より飛び出て實社會に歩を進めんとする此の時、現代は何事にある實踐的であり、徒らに空理空論に耽つて居るを許さない。外形の立派なものよりも、實質の佳良なものを欲して居る。今日我々は高祖大師の爲法不惜身、不言實行の御精神は實際上事實を把握せよの教へなれば、吾人等は飽く迄も眞摯な態度をもつて參禪辨道し、實際の上に高祖大師の御教へを遵奉して行かねばならぬ。